

に、はるか届かず、世界した。

ああ、弟よ、妹よ

岐阜県 河野 忠 昭

「とき子が死んだ」雨、露をしのぐだけの真つ暗な建物の中で、しぼり出すように母が言った。その姿を鮮明に覚えている。

「牡丹江省市鉄道自警村において出生」私は、親切な満人たちに囲まれて、ごくあたり前の幼年時代を過ごし、満人たちが破られたのは、国民学校一年生の八月の初旬のことであった。

ソ連軍が数時間後には攻めてくる。すぐに鉄道で逃げろ、との突然の命令に、母は子どもたちの手を引き満人の出してくれた馬車で、自宅から一里ほどの駅へ向かった。母の荷物はゆで卵、おにぎりを数個、とき子のおむつ、子どもたちの夏の着替えと預金通帳、そして手持ちの現金だけであった。列車はすでに屋根の上まで満杯の

状態であった。が駅長（満人）の好意で、新たにつながれた有蓋車一両に私たちは辛うじて乗ることができた。

幾昼夜、その列車に揺られていたことだろうか。ある駅で突然全員列車からおろされた。そこで初めて、戦争は終わった、と聞かされた。そのまま近くの粗末な建物の中で、平穏な一週間を過ごしたのであるが、ある朝突然、満人の暴徒達が、現れて私たちから金目のものはすべて奪っていった。さすがに女、子どもの着物や、あかん坊のおむつには手を出そうとはしなかった。が、男たちはふんどしまで奪われ、抵抗しようとした者は皆、半殺しの目にあつた。こんな危険なところにはおられないと、その時から私たちの必死の逃避行が始まった。

私は自力で、母はとき子をおんぶして猛（四歳）の手を引いて、とにかく走った。前年十一月に生まれたとき子が、母の背で、キャッキャッと無邪気な笑い声を上げていた。畑の真ん中で夜をあかし、盗んだカボチャやジャガイモをナマのまま食べた。火をたけば人に見つかってしまふからだ。食うや食わずの日々の中、だれかが切れた電線を見つけて言った。「もう、駄目だ、集団自

決」皆が絶望していた。いっせいに手をつなぎ、いちばん近い人が、垂れ下がった高圧電線を握った。が幸か不幸か、送電はされていなかった。

死ぬことも許されなかったおとなたちは、必死で生きる道を模索した。残りの金全部を出し、男たちが満人に変装して情報を得、撫順行きの手に入れてきた。

撫順には日本人が多く集まっているというのである。ようやく私たちはその撫順のレンガづくりの刑務所跡にたどりついた。そこはとりあえず平穏な地であったが、決して安住な地ではなかった。季節はすでに九月に入り、夜は霜すら降りた。夏物しか持たず、満足な物も食べられない生活で母乳も出ず。飢えと寒さで弟も妹も日に日に、やせ衰えていった。折もおりハシカが流行し、子どもたちをいっせいに襲った。幼い頃ハシカを済ませていた私は難を逃れたが、とき子も猛も例外ではなかった。暖めて栄養のある物を食べさせればかんとんに治るものなのに、とき子も猛も、ほんの一週間足らずで亡くなってしまった。

それから引揚げるまで、そして引揚げてからも、子ども

もながらに苦勞のあったことを忘れることはできない。戦争とは、兵隊だけのものではなく、その犠牲となるのは、まず弱い者からなのであることを一。

## 二か月がかりの帰国

愛知県 荒牧 実

私は昭和三年満鉄入社のため渡満。以来十八年の間、満鉄社員として家族四人で終戦をむかえたのである。敗戦によってわれわれ邦人は、主権のない国民としてあらゆる屈辱と苦難に耐え、くる日もくる日も生死の境をさま迷いながらついに二十一年七月十二日、名誉も地位も財も捨てて、一人につき持てるだけの着物と食料品、金は一千円だけ。貴金屬はいっさい持つことを許されず、丸裸同然の姿で引揚げることになったのである。

私の家族は、鞍山第三十八大隊に編入され、鞍山駅から、コロ島向け出発したのである。炎天下四十度の暑さの中で無蓋車に乗りこみ、身動きができないすし詰め